地域教育情報紙
（令和２年度）
第 ３ 号

風と共に

令和２年９月９日発行
《担当》　富士･東部教育事務所
地域教育支援スタッフ
蔦木治彦･ 古屋修宏・飯室　毅

『 風と共に 』は、富士･東部地域教育の様々な活動、情報等を掲載し、
地域教育の「横の連携」と「縦の接続」
を目指す富士･東部教育事務所が発行する情報紙です。１年に６回程度の発行を予定しています。

富士･東部教育事務所地域教育支援スタッフでは、
（1） 家庭、学校、地域の連携による地域ぐるみの教育活動の活性化を図る。
（2） 地域における体験活動・ボランティア活動の環境を整備し、地域教育力の活性化を図る。
を目標に掲げ、地域の教育力を高めるためのコーディネーターとして、家庭・学校・地域社会がお互いに連携を深め、青少年の健全育成のため活動しております。

「チャレンジ！上高アニマシオン」　上野原高等学校

県立上野原高等学校(小佐野景賀校長)では、８月３０日（日）に上野原高校図書室において、「チャレンジ！上高アニマシオン」を開催しました。今年度は、新型コロナ感染症の影響から８月４日に計画されていた活動を延期し、上野原高校のオープンスクールの中での実施となりました。

上野原高校は、図書委員会を中心に、「他の人の意見を聞き、自分とは違うものの見方や考え方を発見し、思考力や判断力、問題解決能力を身につける」ことを目的に、「読書へのアニマシオン」に取り組んでいます。

当日は、アニマシオンの作戦12「前かな、後ろかな？」を行い、アニマドールのもと参加者全員で取り組みました。また、作戦34「彼を弁護します」では、参加者全員が登場人物役やギャラリー役になり、アニマドールの司会で質疑応答をしました。他者の意見に触れることで多角的な読みが可能になり、分析力、傾聴力、思考力等が育てられた有意義な活動でした。

アニマシオンとは？　参考文献：『読書へのアニマシオン 75 の作戦』M.M.サルト著　宇野和美訳　柏書房
スペイン青年雑誌編集長のモンセラ＝サルト氏が開発。グループを作って一緒に考えたり、自分の考えを友達に伝えたりと本を読むことや言葉遊びのおもしろさ、楽しさを体験しながら学ぶプログラム。

高1ギャップ解消へ!!　『出前授業 in 河口湖南中』　富士河口湖高校

７月１０日（金）に県立富士河口湖高等学校（小川弘一校長）の教員８名が、河口湖南中学校（古屋義幸校長）を訪問し、３年生１６７人に対して出前授業を行いました。この行事は 2016 年から始まり、今年で５年目になります。

当日は、数学「数列を楽しもう」、理科「芳香剤を作ろう」、国語「源氏物語を読む」社会「旧国名や都の地図の見方」英語「アニメ映像の英語を楽しむ」等の授業が行われ、中学生たちは、高校の考えさせる授業や実験に興味深く取り組んでいました。河口湖南中の若林渓一郎教諭（英語）は、「中学で学んでいる文法が、実際の場面でどのように使われているか、先生と ALT の会話を通して確認することができ、生徒にとって有意義な時間となりました」と述べています。

「小１プロブレム・小４ビハインド・中１ギャップ」と同様に、子どものキャリア形成の過程で抱える問題の一つに「高１クライシス（高１ギャップ）」があります。新しい学校や友人関係、学習のスピードや質・量の増大といった環境の変化に馴染めずにストレスから体調不良を生じてしまうことです。こうした中学校と高校の違いを中学校時代に体験することで学習面でのギャップを埋め、自己の進路を考える契機に「出前授業」はなります。河口湖南中学校では、早めに体験をすることで、生徒の進路意識を高める取り組みをしています。

～戦争の記憶：戦争を知らない私たち～

記憶を引き継ぐ　都留高等学校　遺髪塚　清掃活動・法要

毎年、県立都留高等学校（渡邉信介校長）では、生徒会が中心となって大月空襲で犠牲となった「都留高等女学校」の方々を慰霊した遺髪塚の清掃活動を行っています。また８月１３日（木）には、都留高校同窓会、生徒会、教職員、遺族等が参加し、遺髪塚法要が行願寺において行われました。

太平洋戦争も終わろうとする８月１３日、山紫水明の町大月は米軍機の無差別爆撃を受けて、母校都留高女の美しかった校舎は真二つに裂け、生徒１８名、用務員２名が即死し、多数の重軽傷者が瓦礫の下から救出された。その後、さらに生徒２名、教師２名が後遺症のために不帰の客となり、合わせて２４名が悲しい犠牲者となられた。これらの尊い犠牲者の遺髪を頂いて、終戦直後の８月２５日に校葬を行い、学校林であった林鳳山の麓に埋葬してこれを遺髪塚と名付け、御霊をお祀り申し上げた。そして昭和３０年に、都留高女が都留高校となって校舎を閉鎖する折、生徒会の名において遺髪塚の碑を建立しました。また、勤労動員先で都留中生１０名も犠牲となり、校地内に慰霊碑が建立されている。（『山梨県立都留高等学校百年の階』まとめ）

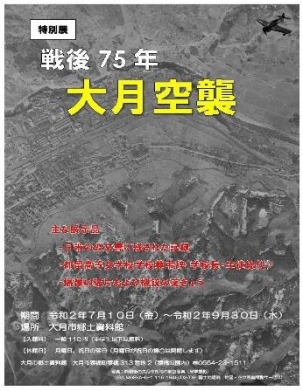
都留高等女学校は現在の大月短期大学の地にあり、昭和２０年当時は落下傘製作の学校工場として女学生たちが作業をしていました。その後、被害を免れた都留高女の同窓生たちが、遺髪塚の整備・法要を行ってきましたが、高齢化や同窓会の解散に伴い、現在の都留高校同窓会に管理を依頼するにいたっています。平成１６年から都留高校生徒会の生徒が清掃活動を行い、平成２４年からは遺髪塚法要にも参加をしています。

都留高校では、１・２年生の「総合的な探究の時間」のテーマの一つとして、「大月空襲」を取り上げ、生徒たちが調査研究を行い、次世代へ伝えることを探究しています。

「大月空襲」特別展　in　大月郷土資料館

１９４５（昭和２０）年８月１５日、第二次世界大戦が終結しました。多くの人命を奪った戦争。時を経て戦争を体験した多くの人々が高齢化する中で、次の世代に語り継ぐことが大切になってきています。しかし新型コロナ感染症の感染拡大防止のために、例年実施されてきた「吉田空襲展」「大月空襲展」が中止となりました。

大月郷土資料館の深澤眞館長は、長年「大月空襲」の調査研究を行っており、今回７月１０日～９月３０日の期間に大月郷土資料館で特別展を開催し、多くの人々に戦争の記憶を語り継ぐ取り組みを行っています。



「大月空襲」を知っていますか？

昭和２０年８月１３日午前８時２０分。山梨県東部より侵入したアメリカ軍艦載機の編隊が、林宝山頂上より爆弾を投下した。その数は、８０個とも１３０個ともいわれ、浅利防空壕、大月税務署、都留高等女学校、興亜航空工場などが襲われ、多くの被害が生じた。終戦のわずか２日前のことであった。

深澤館長は、「戦後７５年が経っても、空襲の死傷者（含：疎開者）の全容がわかっていません。日々の生活を一瞬で破壊してしまう戦争の悲惨さを大人にも改めて感じてもらいたい。是非、年に１回でもいいので、平和について考える機会にしてください」と述べています。

コロナ禍の中で当たり前の「生活」のありがたさを今我々は感じています。是非、当たり前でない「平和」の尊さを考える機会にしてみてはどうでしょうか？

顔・人・モノ ～富士・東部の地域教育を支援してくださっている方々～

平成１６年に地域情報紙「風と光と」へ一本化されましたが、それ以前に発行されていた「富士の光（光っ子）」は、南都留地区の「連携」による地域教育力向上に主眼をおいた活動をお知らせしていました。「明日の風」は、北都留地区の地域教育の様々な活動や動き、新しい取り組み等の情報を掲載していました。また「富士の根っこ（ふじの根っこ）」は、南北都留の高校・支援学校の特色ある取り組みや異校種間の連携や協力についての情報をお知らせしていました。

今回も、２０年前に南北の教育事務所が統合され、郡内地域の小・中・高の連携を推進し、現在の地域教育活動の基盤を作られた地域支援スタッフに当時の思い出話を語っていただき、今後の地域教育の活動の一助としていきたいと考えています。

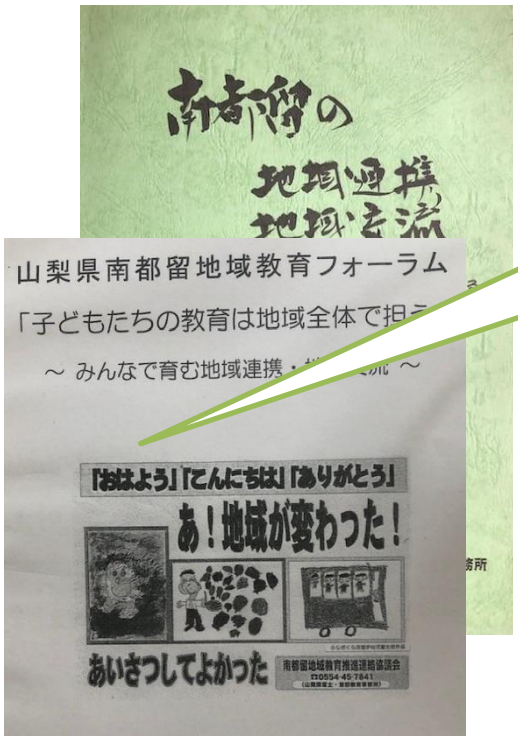
南都留地区「地域教育フォーラム」の思い出　　浅沼　茂夫

思い出が多すぎて、一つに絞って書くことがとてもむずかしく、単なる素描になってしまうかもしれません。

私は平成１４年４月～平成１７年３月の３年間、地域教育推進担当主幹（当時の名称）として南都留地域教育の黎明期に担当者になりました。その頃の私は、ほぼ毎日、教育に関わる諸団体を巡り地域教育の現状を把握したり課題を明らかにしたりしながら外回りをしていました。「浅沼さん、地域教育の仕事は事務所の外に在るんだよ」という安藤先生（北都留担当）の言葉がいつも頭の中にありました。

当時の私のエリアは、市町村教育委員会１０教委、幼稚園８園、保育園３５園、小中学校４５校、高等学校・養護学校８校、大学３校、市町村教育長部会、校長会・教頭会・教育会、南都留地区 PTA 連絡協議会、南都留地区公立幼稚園・私立幼稚園保護者会、南都留地区高等学校 PTA、商工会議所・各商工会、２つの青年会議所、女性団体連絡協議会、都留児童相談所、教育研修所・教育センター、こすもす教室、富士吉田及び大月警察署、富士・東部保健所、その他の関係団体という膨大なものでした。

「子どもたちを健全に育むための連携の重要性と実現の可能性」を訴えながらそれらの団体をくまなく歩き、『地域教育連携事業』を一つでも多くかたちづくっていくのが私の仕事でした。（これらの諸団体が、南都留地域教育推進連絡協議会のメンバーになってくださり今に至っています。）



この表紙絵は、当時のふじざくら養護学校の子どもたちに描いてもらいました。南都留地域教育推進連絡協議会のポスターです。現在も使われています。

《 当時つくられた地域教育連携事業を書いてみます。 》

○南都留地域教育推進連絡協議会の充実
（構成メンバー拡充と協議会総会の定例化）
○南都留地域教育フォーラムの本格展開（７つの分科会になりました。）
○南都留教育相談ネットワーク会議の発足（現在は、北都留地区も参加）
○都留文科大学との種々の連携事業の模索
○特別支援教育担当者会［ふじざくら養護学校（当時）と南都留地区小中学校特教担当者との合同学習会］（これをきっかけに、地域支援だよりが発行されるようになりました。）
○親子ものづくり教室（小学生、保護者、高校生のものづくり教室）
［北富士工業高校（現・富士北稜高校）谷村工業高校（現・都留興譲館高校）］
○南都留地域連携・地域交流集の発刊

※残念なこと～平成１４年度に計画した「南都留小中学校、高等学校、養護学校の児童会・生徒会担当者会」の発足会議が大雪のため中止になってしまったこと。次年度以降は、どうしても小中高養間の調整ができず断念。これが発足していれば、校種を乗り越えた児童生徒たちによる活発な連携活動が実現していただろうと思うと、実に残念です。

（１年目の推進担当者は、北都留：安藤、南都留：浅沼、高校教育：望月。
２年目・３年目は、北都留：永井、南都留：浅沼、高校教育：天野でした。）

5･6･7 にまけるな！ ～各地域教育団体の取り組み～

緊急事態宣言解除後、学校生活の中でも「新しい生活様式」が求められています。こうした中で、各学校や公共施設、地域行政のレベルでさまざまな取り組みが実施されています。今回は、With コロナに向けて取り組まれた４例を取り上げていきます。

大月短期大学　～with コロナに向けた学習環境の整備～

大月市立大月短期大学（柳沢幸治学長）は、全国屈指の四年制大学編入率を誇り、山梨県内からだけでなく、全国各地から進学してくる学生が集まっています。また、首都圏から通勤している先生も多く、新型コロナの感染拡大を避けるオンライン授業を積極的に展開しています。

しかし、短期大学は二年制であるためキャリアサポート（就職指導）を担当する職員にとっては、難しい対応が求められています。井貝昌司キャリアラボ担当リーダーは、「今年の２年生は１年の３月に行われてきた企業合同就職説明会（幕張メッセ）が、新型コロナの影響で中止となり、学生たちの就職にむけた第一歩（きっかけ作り）ができなかった分、個々の学生との対話を重視している」と述べています。そこで ZOOM 機能を活用した学生の面接指導や履歴書・エントリーシート等の添削指導を行い、学生の不安解消に努めています。

８月にはオープンキャンパスが事前予約制（定員 45 名）で行われました。感染防止対策をとる中で実際に来校してもらい、直接みてもらう中で学校の雰囲気を感じてもらったそうです。

今後の後期授業については、新型コロナの感染拡大状況もありますが、オンラインによる遠隔授業の活用とともに、ディスカッションを通した探求型の学習やインタラクティブ（対話型）に議論を深める講座の重要性を考えて、教室での対面授業も感染防止策を徹底した上で開始されます。大月市内に学生たちの活気が戻ってきます。

都留興譲館高等学校～学習の成果を地域に還元：手作り「飛沫感染防止パーテーションの作製」～

県立都留興譲館高等学校（髙野修校長）の機械工学科では、寺田孝建先生らの指導の下、溶接技術の全国大会出場を目指して１年次から放課後に技術の上達を目指して生徒たちが練習に励んできました。しかし今回のコロナ禍によって大会が中止になってしまい、生徒たち（小林迅、長田大弥、原田怜征）は日頃鍛えてきた技術を活用できないかと考え、練習に使った材料を用いて「飛沫感染防止のパーテーション」を自作することにしました。設計や金属加工、溶接、塗装など授業内で学んできた学習の成果を発揮し１４台を作製、校長室等の校内に７台を設置しました。作製者の一人である原田さんは、軽量化と安定性、上部の安全性を考えて作製したと述べています。

また、残りの７台を地域の方に利用してもらいたいと考え、同校の JRC 部（水越泉顧問）の仲立ちで、生徒たちが作製した作品を社会福祉協議会に寄贈することになりました。６月１８日（木）の寄贈式では、小林正樹事務局長が「いきいきプラザ」内の相談室やデイサービスの食堂に設置し、利用者が安心して使用できることに感謝を述べていました。

富士吉田市立図書館 ～活動再開にむけた段階的な取り組み～

富士吉田市立図書館（真田武館長）では、新型コロナ感染症の影響で、５月１１日まで完全休館を余儀なくされました。その後、段階的に「予約図書の受け渡し」→「入館予約制３０名／回」→「入館予約制５０名／回」と開館を拡大し、７月１日からは「予約不要１００名／回」、入館時間５０分間（毎回利用者退館後１０分の消毒実施）で１回に１００名までの入館可能状態での開館へと進んでいます。今後も感染状況によって市教育委員会や対策本部の指示を受けて、図書館利用の拡大を考えています。

小佐野みはる課長補佐は、「図書館は楽しい所」というコンセプトの元で、コロナ禍以前から図書館スペースを利用した「おじヨガ」をはじめとしたイベントを行ってきました。しかし、「３密」「休館」という事態をうけて、オンライン等でイベントを継続しています。特に全国でも人気の「オンライン de おじヨガ（天野ちか講師）」やCATV とコラボしたウチカツ！（家活）プロジェクトでは、「戦慄図書館」「図書館 de ヨーヨーライブ」を行いました。また、館内を利用した犯人捜しを YouTube で公開した「図書館司書殺人事件」なども、図書館を身近に感じられる活動となっています。また、コロナ禍により他の機関が主催する「母親教室」などの中止による妊婦さんの不安解消のために「図書館 de お産学校」「図書館 de ベビーマッサージ（渡邊美幸講師）」をオンラインで行っています。

図書館を核に、地域の方々の力を活用した取り組みは、受付カウンターに設置されている飛沫感染防止シートに、美術大学卒で地域おこし協力隊の坂本美紗希さんが植物の絵を描くことで「シートに隔てられた来館者との心の距離を繋ぐ」取り組みにも現れています。１０月には、「YouTube でバーチャルお化け屋敷」も公開予定です。多彩な人材が集う富士吉田市立図書館に足を運んでみてください。

富士吉田市立看護専門学校 ～専門性を生かした地域への啓発活動～

富士吉田市立看護専門学校（樫本温校長）では、CATV 富士五湖（武川以爾身代表）と協力して、健康情報番組を制作しています。CATV 富士五湖の視聴者から健康情報を取り上げてほしいとの要望があり、同校と協力して制作することになりました。第１弾は、７月２３～２５日の間に、毎日５回「まちの話題」コーナーで放映されます。今後も来年３月末までテーマを変えて、毎月放映する予定です。

取材に訪れた７月２９日（水）には、８月放映予定の「フットケア～知っておきたい爪の切り方」の収録が行われていました。足のトラブルを解消し、よりよい状態に導くことは、健康の第一歩になります。学生たちが実演を交えて紹介していました。第１回放映でも新型コロナ感染症対策に有効とされる「手洗い＆熱中症予防」について、同校専任教員２名と学生３名が実演を交えて紹介しました。こうした活動について渡辺貴子科長は、「学生たちの学習を知ってもらう機会であり、学生にとっても人にわかりやすく伝えるよい経験になる」と述べています。

また、６月２５日には新型コロナの感染者らの治療に当たる医療従事者への感謝の気持ちを表す動画を YouTube などで公開しています。

10 年連続看護師国家試験合格率 100%の実績のある同校は地域とのつながりを大切にし、社会に貢献していきたいと考えています。そんな富士吉田市立看護専門学校に関心がある方は、同校庶務課にお問い合わせください。

放映予定のテーマ

・・・シリーズ看護学校からお届け！・・・

９月	沐浴の今と昔
１０月	高齢者の転倒防止①
１１月	高齢者の転倒防止②
１２月	皮膚の保湿
１月	湯たんぽの使い方
２月	薬の飲み方
３月	点眼の方法

小学校で外国語教育スタート　富士吉田市　外国語教育研究会

富士吉田市教育研修所（三浦雅彦所長）が主催する「外国語教育研究会」の第３回研究会が、７月３日（金）に開催されました。令和２年度４月から小学校における外国語教育が全面実施されました。外国語の専門科目の教員がいる中学校と異なり、小学校の先生方は専科教員との協働によって、外国語による言語活動を通したコミュニケーション能力の育成を目指した授業に取り組んでいます。

小学校では、学級担任を主体とした子どもたちが失敗を恐れずに英語を使うことにチャレンジできる学習集団づくりとともに、専科教員による英語力と英語に関する指導の両面が存在しています。

今回は、コロナ禍の中で「授業を進めるにあたってのＡＬＴの活用」や「評価の仕方」などについて小・中に分かれて情報交換がなされました。中学校の先生は、「現１年生は、小学校で英語を学習していたおかげで、コロナの影響で２ヶ月スタートが遅れたが、例年並みの学習進度で推移している」と述べています。

この会議に吉田高校の教員３名も参加し、富士吉田地区の小・中・高の連携を一歩深める交流の場となりました。廣瀬志保吉田高校教頭は、「小・中学校から要請があれば、教員等を派遣し、連携を深めていきたい」と積極的な連携推進の意義を述べています。

高校生と地域をつなげる　NPO 法人かえる舎　活動レポート

特定非営利活動法人「かえる舎」は、富士吉田市と連携している慶応義塾大学・大学院で学んだ斎藤和真さんと赤松智志さんが、富士吉田地域おこし協力隊での活動後、2017年６月３０日にNPO 法人の認可を受け、設立されました。現在は、渡辺紀子さんを含めた３名で活動しています。

斎藤さんは「かえる舎の活動は、高校生が地域の魅力的な資源やそこで暮らす人たちと出会い、交流する機会をお手伝いする」ことです。これをきっかけに「見つめ、考え、活かすことで社会に関わる一歩を踏み出すきっかけづくり」と述べています。「地域が子どもたちを育て、子どもたちが地域の未来を育てていく。「自分をかえる、社会をかえる、か・え・る・舎」の名前の意味です。

これまでの活動は、市役所や学校と連携した「総合的な学習の時間（授業）」【富士北稜高校・吉田高校】や富士北稜高校の生徒とふるさと納税課を結んだ「返礼品 PR」や「寄付者もてなしツアー」の企画・運営、吉田高校のキャリア教育「やまなしに生きる」など多岐にわたっています。また、学生たちが自主的に課外活動として集まってきた中で始まった事業（商品開発：味噌、甘酒、イベント参加、ワークショップ）のサポート、慶應義塾大学との連携事業「small」のコーディネートなども行っています。現在は、年々参加する生徒の高校が増える中で、活動拠点作りも行っています。

今後は、コロナ禍に直撃された「観光」をテーマに、地元が持つポテンシャルを掘り下げたPRや市内の中学校へのキャリア教育サポート、下吉田第一小学校への地域学習支援を行っていく予定です。また、地元が生んだバンド「フジファブリック」を継続して取り上げていくとのことです。

《《 インフォメーション 》》

- 南都留地域教育フォーラム　10 月 29 日(木) **対面での開催中止**
- 「伊藤知治教士　剣道教室」10 月 25 日（日）**中 止**　　○「アスリート実技講習会」10 月 3 日（土）実施予定
- 「吉田空襲展」「大月空襲展」**中 止**・・・大月市郷土資料館にて９月末まで「大月空襲」特別展を開催

アカデミック・インターンシップ　～地域で育てる～

吉田高等学校　理数科「課題研究」発表会

発 表 会

富士山の銘水株式会社

山梨大

ドローン
県産業技術短期大学校

平成２３年から県立吉田高等学校（古屋勇人校長）の理数科では「課題研究」を行っており、今年で１０年目になります。学校にはない設備や実験器具を使用し、発展的な実験・実習を地域の企業・研究所、大学等の協力のもと、生徒が各協力機関に赴き、臨床研究を行っています。８月２９日（土）に同校視聴覚室において、理数科「課題研究」発表会を行いました。

コロナ対策もあり、参加者は理数科１・２年生と保護者54 名（事前登録制で子どもの発表時のみ参観）でありましたが、多くの質問が挙げられ、発表者たちは、丁寧に説明を行っていました。

「課題研究」という教科は、科学や数学に関する課題を設定して、その解決を図る学習を通して、専門的な知識と技能の深化、総合化を図り、問題解決能力や自発的・創造的な態度の育成を目的としたものです。

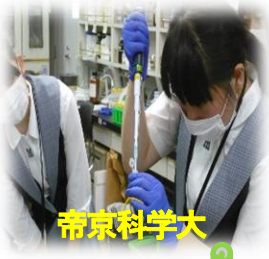
今回生徒たちは、富士山の銘水株式会社・昭和大・健康科学大・帝京科学大・山梨大・県産業技術短期大学校・県産業技術センター・生物多様性センターなどの方々の指導を受け、興味ある学問分野に関係した研究活動を体験し、学習意欲や進路意識を高め、探究する力を身につけることができました。また、「高校２年の段階で専門的な研究に触れ、自分のキャリアデザインを考えるきっかけになった」と感想を述べています。

指導・助言にあたった方々も「高校生の発想力の柔軟さや我々が既知に思っていることへの何気ない疑問に、ハッと気づかされる場面があり、我々にとっても新鮮な交流ができた」と述べていました。

昭和大①

昭和大②

県産業技術センター


帝京科学大

図書館を核に地域とつながる　富士河口湖町立船津小学校　新校舎完成

明治７年に設立され、本年度で 147 年を迎える富士河口湖町立船津小学校（小林統也校長）は、今年７月に新校舎が完成しました。

船津小では「生きる力をはぐくみ、心身ともに健康で、たくましい実践力をもつ子どもの育成」の目標のもと、知・徳・体のバランスのとれた教育活動にあたっています。

給食調理室も一新

８月１１日には竣工式が行われ、新校舎を訪問すると、木材をふんだんに使った校舎は明るく温もりを感じさせるものでした。広い廊下を挟んで教室が配置され、ベランダの窓からは、河口湖湖畔が一望できます。

６年前から新校舎建設の検討が始まり、地域とのつながりを重視した学校づくりをコンセプトとした校舎づくりが繰り返し検討されました。新校舎が１棟形式になったことでグラウンドを広くとることができました。冷暖房の完備や多様な学習形態に対応した設備は、子どもたちの主体的な学びを醸成する土台となることでしょう。

生涯現役　ことぶき勧学院　活動自粛中の自己研修レポート

人生１００年時代を生きる現代のシニア世代にとって、充実した生きがいのあるセカンドステージをデザインすることが求められています。シニア世代の生涯学習の場の一翼を担っていると考えられるのが、全国に先駆け３０年を超える歴史を持つ「山梨ことぶき勧学院」の存在です。勧学院は社会に貢献するシニア、社会資源としてのシニアを目指し、それまでの人生を編みなおし、学びなおす場として様々な学習や活動の機会を提供し、その卒業生は８５００人を数え、地域におけるリーダーとして様々にご活躍です。

令和２年度は、新型コロナ感染症の感染拡大防止策により、４月からの開校が困難となり、９月から開校の運びとなりました。活動自粛の要請を受け、日常生活においてもシニア世代の範となるべく、３密を避け各々自宅において勧学院生徒ならではの自粛の日々を過ごしました。

その日常の様子は「自粛の日々レポート」として文集に編み、それを読み合う事によって友情の絆を保つようにしました。「孫とＳＮＳを通してともに種を蒔き育てるという植物栽培のプロセスをリアルタイムで知らせ合った」「地域の自然や畑で日々育っていく野菜の写真を離れて暮らす子供や孫に送った」「自宅の庭をアレンジして憩いの場を手作りした」「自分史を書き始めた」「これまで積んでおいた本を読んだり、短歌・俳句・詩作に励んだ」など、人との接触を避けながらも前向きな報告が続きました。

また、共通教材となる資料を基に、各家庭において自主学習を行い、その学びの成果は「自学レポート集」にまとめ生徒相互に情報交換を行いました。この学習の成果は、資料を読むだけでなく、実際に取り組んでみての内容になっていますので、写真やイラスト、絵手紙や短歌や俳句などの作品を添えてのレポートとなりました。

例えば、１年生は山梨学院大学の田草川先生の「高齢者の栄養と健康」の資料をもとに、実際に食事を作りそれを分析して報告し合いました。同じメニューでも調理方法やレシピが異なることもあり、ローストビーフなどは３通りの作り方が紹介され大変勉強になったと好評でした。

また、２年生の山梨体育協会による「高齢者の免疫アップと筋力アップ体操」の学習の取り組みでは、実際に体操に取り組んだ様子と感想をレポートにまとめました。６０代から８０代の生徒が共に学ぶ「勧学院」ならではの実践は、年代に応じて、紹介された体操をアレンジし、自分の体調や体力に合うよう工夫しながら、取り組んだ様子がうかがわれます。筋力アップ体操はその強弱が問題なのではなく、それぞれの体力に応じて無理せず毎日続けることの大切さが身をもって感じられたという声が多く報告されました。

さらには、生徒それぞれの「自粛の日々」の取り組みを文書によって情報交換することによって、むしろ教室で講義を受けるというのとは違った観点から勧学院生相互の理解が深まったとか、令和２年に在籍していたからこそ、コロナ禍で自粛生活を送った記録になるという意見も聞かれました。このように、「ピンチはチャンスととらえる」「ネガティブな状況をポジティブな結果に転換させる」など、困難な状況にあっても柔軟に対応できる知識を獲得し、力と技を磨きながら、人と人をつなぎかかわりを豊かにしていく事は、これからますます多様化複雑化していくことが予想される地域社会にとって「明日を生き抜く力」となるでしょう。是非多くの方々に「山梨ことぶき勧学院の魅力」を知っていただきたいと思います。

【　カラー版は、富士･東部教育事務所のＨＰからご覧いただけます。
URL：http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ft/jouhoushibackn.html　】

地域の皆様のご支援ご協力を得ながら、実りある実践となるよう努めてまいります。各事業についてご意見ご要望がありましたら地域教育支援スタッフまでご連絡ください。※連絡先　富士・東部教育事務所 地域教育支援スタッフ　0554-45-7841